

私の知るエルサルバドル ～ I'm a pupusa man myself ～

青年海外協力隊の一員として、2011年1月～2013年1月の2年間、エルサルバドル国首都サンサルバドルの国立工業技術高校（Instituto Nacional Tecnico Industrial、通称 INTI（学生/学校関係者等には ITI の方が好まれる））で電気電子機器の隊員として、主にマイクロコンピュータやプログラマブルロジックコントローラーといった制御装置を用いて制御工学やプログラミング等を指導する活動をしていました。

配属先は工業高校というだけあって、生徒の大半は男子学生だったので、どんな学生が出てくるのかと着任当初は緊張したのですが、蓋を開けてみるとどの学生も気さくで、先生方や私に対しては、いつも礼儀正しく授業や実習中の姿からは、ここで学んで将来はしっかりと職を得たい、立派な技師・技術者になりたいといった気持ちが垣間見えるくらい真面目さを感じました。ただし、サッカーのことにになると別で、生徒らのほとんどはサッカーファンで、特にスペインのプロサッカーリーグのレアル・マドリードと FC バルセロナの 2 派にファングループが分かれており、両者対決の日に授業時間と試合時間が重なると、授業が中断もしくは生徒が授業にやってこないこともしばしばありました。同僚に何とかしてくれと助けを呼ぼうとすると、その同僚が率先してテレビをつけて観戦しており、呆れることもありましたが、先生も生徒も垣根のないファンとして、その瞬間を共に楽しんでいるのを見てると、これもエルサルバドルで見られる和やかな風景の一つかと思います。

また、日本人が来たということで、活動 2 年目に突入する手前くらいだったと思いますが、外国語教室の 1 つに日本語クラスの開設を学校側から要請を受け、毎週土曜日に設けて少し大変でしたが、1 年間やってみることにになりました。さすがに日本語指導はド素人で、テキストを見ては悪戦苦闘する状況でしたので、スムーズな教え方はできませんでしたが、少し気づいたのは、学校の生徒以外にも外部の人もたくさんやってきて、きっとこのクラスに集まってくれた若いエルサルバドルの人たちは、この日本語クラスだけではなく、色んなことやアクティビティに興味を示しており、たくさん見聞き、体験できるような場所を求めているのだろうと感じました。



電気科工業高校生



日本語クラス

さて、生活面で1つ隊員ならではとは思いますが、2年の間はホームステイしながら活動を行います。私は、サンサルバドル市内にある老夫婦の家にホームステイをしていました。家族のように扱ってくれる温かな雰囲気は私の活動を精神面でも支えてくれました。夕方、学校から帰って、晩御飯までの待ち時間にホームステイ先のお爺さんと「CASO CERRADO」という番組（スペイン語圏の法廷ショー番組）やサッカーゲームを見ながら、お爺さんと一喜一憂してから、少し小さめの丸テーブルを囲って晩御飯の時間を過ごすのが、ささやかながらも日々の活動の大変さを忘れられるひと時として、良い思い出の1つとして残っています。ホームステイ先の家族だけではなく、たくさんエルサルバドルの家族と知り合う機会がありました。みな家族や友人を大事にする気持ちは強く、彼らと触れ合う経験もまた目で見えるものではないが、心豊かな経験として自分の中に残っていると思います。



思い出のホームステイ先



お出掛け好きな友人らとの遠足・旅行も醍醐味

エルサルバドルでやはり気になるのは、安全についてでしょうか。私の感想としては、危ないと言われるエリアには滅多に用事も無かったことと、ほとんど近づかなかったため、危ない目に会ったことはありませんでした。JICA や大使館等からは、必要に応じて安全情報が発信されていたので、それらの情報に少し注意を払って行動していた程度だったと思います。当時は、基本的な移動は、学校には同僚らが送迎してくれましたが、プライベートでは、主に JICA や隊員間でも信頼のあるタクシー会社のタクシーを呼び出して利用していました。サンサルバドル市内では、大通りや商業エリア等への外出の他に、スペイン語の個人レッスンへの市内移動に徒歩移動や市内バスも良く利用しましたが、特に危ない経験はしなかったです（2018年にエルサルバドルを訪れた際には、配車システム“Uber”も普及していたみたいで、より利便性が上がっていた印象も受けました）。現地の同僚や友人、先輩隊員などの交流を経ながら、次第と安全感覚が身について、行動範囲も広がっていったと思います。夜間は人通りが減りますので、むやみに出かけるのは控えた方が良いでしょう。過大に神経質になる必要もなく、安全なエリアのレストラン、バー、友人宅での食事、映画館・劇場等といったところにもよく出掛けては利用していました。学校行事の経験では、年に一度、学生が学んだことの集大成として製作物に取り掛かる展示会イベントがあり、製作には夜通しかかることもありましたが、父兄や学校関係者が率先協力して学生を安全に帰宅できるように配慮するなど、エルサルバドルの人たちも安全に対しては、とても理解があり協力的でした。

最後に、私はエルサルバドルの女性の一人と良い出会いをし、結婚に至りました。この話は別の何かの機会に譲るとして、エルサルバドル=ギャング（恐い）といった結びつきの話を聞く度に、妻の少し悲しい顔を見るのは残念な気持ちになります。エルサルバドルの人たちの中にもエルサルバドルのイメージアップに頑張っている人がたくさんいることを知っているだけに、その人たちの顔が思い浮かぶのでしょう。そんな中、最近ハリウッドスターのレオナルド・ディカプリオがブラッド・ピットらと、とある映画番宣での対談で、“I’m a pupusa man”と言うほどエルサルバドルの伝統的な料理であるププサを愛していることを表明していました。エルサルバドルは、ププサ以外にもたくさん魅力はありますが、今でもププサをこよなく愛する“Pupusa man”である私も一つププサを押し伝えていこうと思った次第です。

“エルサルバドル=ギャングじゃないよ、ププサだよ”と。



Pupusa man にしてくれたププサ屋



My ププサ T シャツ (“Pupusa man” T シャツリリースに期待)

岸川 剛（きしかわ ごう）氏

2011年1月から2013年1月までエルサルバドル国にて電気電子機器隊員として活動。

その後、造船・海運関連企業に入り、同企業の南米の河川輸送船プッシャー初建造にパラグアイ国へ着任。

現在は、フィリピン国でのバイオマス燃料製造、日本国内ではバイオマス発電および小水力発電等のプロジェクトに従事し、新エネルギー分野を通じて、主に東南アジアと南米との関りを持ち続けている。